



平成 28 年度

「高志の国文学」情景作品 コンクール入選作品集

【主催】

富山県・富山県教育委員会
富山県中学校文化連盟
富山県高等学校文化連盟

発刊に寄せて

富山県知事 石井 隆一

近年、少子高齢化や人口減少、グローバル化が進展するなか、「元氣な富山県」を創るためには、今日の富山県を築いてきた先人の志やチャレンジ精神に学び、ふるさと富山県に誇りと愛着をもちながら、本県はもとより全国や世界の舞台で大いに活躍できる人材を育成すること、すなわち「人づくり」が重要です。

また、本県では、平成二十七年三月の北陸新幹線開業以来、県内各地で様々な開業効果が顕著に現れており、さらなる飛躍に向けた絶好の機会を迎えています。こうしたなか、夢や希望、高い志をもって、富山県の新しい未来を力強く切り拓いていくことができる人材が求められています。

このため、県では、ふるさとの自然、歴史、文化、産業等に関心を深め、ふるさとへの誇りや愛着を育む「ふるさと教育」の推進に積極的に取り組んでいるところです。

この一環として実施している本コンクールも、今年度で七回目となりました。今回も、ふるさと富山の魅力、先人の知恵や生き方への素直な感動やあこがれが、瑞々しい感性で表現された素晴らしい作品が数多く集まり、大変うれしく、頼もしく感じています。

皆さんの未来には、無限の可能性が広がっています。今後、難しい問題にぶつかるともありますが、決してあきらめず、情熱をもって果敢にチャレンジしていただきたいと思えます。そして、皆さんが生まれ育ったふるさとへの誇りや愛着、家族や地域の方々との絆を大切にしながら、富山県の未来を切り拓く人材へと、大きくたくましく成長されることを心から期待しています。

富山県教育委員会 教育長 渋谷 克人

富山県には、四季折々の美しく豊かな自然や風土の中で生まれた多くの文学作品があります。このコンクールは、それらの「ふるさと文学」を通して、郷土の先人の心や優れた知恵に触れ、感じた情景や心情を文芸、美術、写真で表現することで、ふるさとの魅力を知り、愛着や誇りをもつきっかけとなるように実施しました。今年度は県内中学生・高校生から一六七二点の応募がありました。

富山県の未来を担う若い皆さんが、先人の喜び、悲しみ、悩み、感動などを伝えるふるさと文学に接することは、文化を再認識し、ふるさとのよさを継承、発展させていくために大変意義のあることです。そのため、県教育委員会では、高志の国文学館を拠点としたふるさと文学の振興等、「ふるさとを学び楽しむ環境づくり」を重点施策とし、「ふるさと教育」の推進に積極的に取り組んでいるところです。

この作品集には、中高校生がふるさと文学での感動をもとに、新たな創作に取り組んだ作品がまとめられています。この冊子が、新たなふるさとのよさや魅力の発見につながることを期待します。今後ともふるさと富山の文学に親しみ、読書活動を深め、自分とふるさと、そしてこれからの人生について考えるきっかけとしていただくことを心から願っています。

入選作品集の利用にあたって

- 入選作品の原作紹介のために、初出の作品に読書案内のコラムがあります。
- 文芸部門については、冊子の構成上、ジャンルごとにまとめて掲載しました。
- 美術部門・写真部門は入選順に掲載しました。
- 入選作品集は、「富山県 生涯学習・文化財室」のホームページからダウンロードすることが出来ます。

知事賞

『ドラえもん』を読んで

猫型ロボットを待ちきれない

高岡南高等学校一年 小嵐 龍太郎

Q: あなたを色で喩えたら

広がる夢

どこまでも

どこまでも

わたしの色は空の青

Q: あなたを動物で喩えたら

好奇心

いつまでも

いつまでも

わたしは自由に気ままな猫

A: 未来を待ってられない

わたしは夢へと突き進む

でも

寄り道はしよう

好奇心の赴くままに

自由気ままな旅路の先

わたしは未来を待ちきれない



この一冊

ドラえもん

藤子・F・不二雄／著 小学館

22世紀からやって来たネコ型ロボット「ドラえもん」と、勉強もスポーツも駄目で何をやらせてもドジばかりの小学生「野比のび太」が繰り広げる少し不思議（SF）な日常生活を描いた作品。

『おおかみこどもの雨と雪』を読んで
故郷、とは

高岡南高等学校一年 田形 梨恵

都会というものに対して憧れを抱いたことは何度もある。ビルだとか綺麗なお店だとか交通手段だとかが辺り一面にたくさんある。そんな都会と比べて私の住んでいる富山は田舎だ。都会とはまるで違う。私の家の周りに都会といえるものはまるで無い。あるのはご近所さんの家と工場、あとは田んぼぐらいしかない。自然が嫌いというわけではないが、やはり好きともいえな

いでいた。
そんな富山県を題材とした作品をいくつか見たことがある。その中でも特に好きなのが細田守の「おおかみこどもの雨と雪」だ。

物語の主人公は母親である花、娘の雪、息子の雨の三人だ。父親であるおおかみおとこが死んでしまったことをきっかけに、花は田舎に移り住むことを決意。田舎での生活が始まっていく中で三人は自然、住民たちと関わっていくことで次第に成長していく。そして雪と雨が人間として生きていくべきかオオカミとして生きていくかという悩みを抱え、それに対し花が自分なりに二人を助けようと努力するという話だ。

小学生の時にこの話を読み、感動したことを今でも覚えている。映画を見た時に鳥肌が立ったことも覚えている。三人の心情についてもだが、周りの自然についても目が離せないくらい美しいと感じた。実際に私の家と物語の中で景色は違うものであったが、そこがまるで自分の生まれ育った場所だともいうように三人のことを温かく包み込んでいた。

私のイメージでは、夏の山と冬の山の景色がとても美しかったように思う。夏は緑が輝き、畑が野菜でいっぱい。山の中では動物たちがひっそりと暮らし、風に揺られた葉がざわめき小川のささやきと共に流れてゆく。

冬は一面が白となり、誰かといっしょに過ごしたくなるような寒さに包まれる。山では、動物たちは静かな眠りにつき、雪解け水がチロチロと下ってゆく。

夏と冬を比較すると、人間の中のイメージからか、夏のほうが温かさ、懐かしさを感じられることが多い。しかし、私はこの物語での冬の景色がどうも頭から消えない。三人が雪山にやって来たワンシーンだ。降り積もったまっさらな状態の雪に自分の跡をつけながら、三人は全速力で駆け抜けていく。花が二人を抱きしめ、雪の上に寝転び笑顔を見せる姿はとても居心地が良かった。冷たい雪の中で家族の愛を表現することでより大きな感動が得られた。

この物語を見終えた時、ふと自分ももっと幼い頃を思い出した。雪と雨のように家の周りではしゃぎ成長してきたことが想像できた。これはきつと、同じ故郷、富山だからこそだろう。この景色の感覚は一度たりとも私の人生で忘れられないだろう。

都会への憧れを、まだ忘れられないでいる。一面に様々なものが輝いて見える。

そんなことを思いながらふと窓からの景色を見る。そこには、いつもと変わらない何十、何百、何千、何万回と見た同じ景色がある。それは私の描く都会という妄想とは全く違う景色。幼き頃から輝きは衰えることはない。妄想とは比べる必要もない。そこが故郷であるのだから、忘れることなんてありえない。



この一冊

おおかみこどもの雨と雪

細田 守 / 著 角川文庫

大学生の花は、『おおかみおとこ』に恋をし、『雪』と『雨』の姉弟が生まれる。都会の片隅でひっそりと暮らす四人だが、『おおかみおとこ』の死を機に、田舎町に移り住む。映画原作にして細田守監督初の小説。

『ドラえもん のび太と緑の巨人伝』を鑑賞して
ドラえもん分析

高岡高等学校二年 松村 妙子

今年の夏、私は高校の授業の一環として、初めて高志の国文学館に訪れました。そこで開催されていた企画展、「面白いアニメづくりのスタジオの中へ」を見学し、あるワークショップを行いました。その内容は、「アニメ分析」です。

この分析は、あるパドックスに基づいて行われます。真の「正しさ」は「嘘」によって導き出される。言い換えると、素材としての事実は、虚構という思考過程を通せば、人を感動させる真実へと変化する。つまり、そのアニメの製作者が視聴者に伝えたかったメッセージは何なのか。それを伝えるために使われた虚構、フィクションはどんなものか。その前提として存在する事実は何なのかを読みといていくのです。題材となったアニメは、万葉集をテーマに製作された、富山らしいアニメでした。この機会がなければ、私はただアニメを楽しむだけで終わっていたと思います。しかし、教わったパドックスのつとつて分析を進めると、万葉集や短歌の素晴らしさなど、いくつかの真実を伝えるために、主人公の設定はもちらんのこと、背景や場面設定、BGMにまで至るところに工夫が隠されていたのです。この日私は、今までは持っていなかった新しい視点を得ることができました。

その時から、この新しい視点を生かして、もつと他のアニメや映画を分析してみたいと思うようになりました。そこではつと思いついたのが、「ドラえもん」です。数えきれないほど多くの話があるドラえもんですが、その中でも私の印象に強く残っている、二〇〇八年に公開された映画「のび太と緑の巨人伝」を分析してみたいと思います。

この話のあらすじは、急速に都市開発が進み、次々と自然が破壊されていく地球の姿に危機を感じた緑の星の住人達が、自然を守るべく地球から全ての植物を移住させようとする、というものです。計画を止め、地球を守るために、ドラえもんの道具で誕生した話せる植物、キー坊とのび太たちが協力します。この話の真実は、大きく分けて二つあると思います。一つは友情、一つは人と緑の共存です。

まず、私たちが暮らす地球が危機にさらされるといふ設定によって、幼い子ども自分の事のように話に入り込むことができます。次に、愛着のわくキー坊というキャラクターが登場することで、見る人の心をつかむことができます。さらに、のび太などメインの登場人物が小学生であることによって、ドラえもんを最も見る来るであろう小学生以下の年代はとても親近感がわき、時には自分とおきかえたり、共感したりできます。もちろん、まだまだたくさん虚構はあります。ですが、このような虚構が見る人を映画にくぎづけにして、真実が伝わりやすい状況を作り出しているのだと思います。実際、私も映画の世界に入り込み、真実に涙したことを覚えています。そして最後に、事実です。前提として、地球温暖化があるのだと思います。この深刻な事実をドラえもんを使って若い世代にも伝え、自然を大切にすることを促してほしい、という願いが込められていたのではないのでしょうか。高校生になった今、分析してみると、この話には地球規模の重要なメッセージが隠されていたようにさえ感じました。

もう一つ、この話に何より欠かせない事実は、藤子・F・不二雄の存在です。今や世界的にも有名なこの人物が富山県高岡市出身ということは、富山県人なら誰もが知っていることだと思えます。駅前にはドラえもんポスト。街を歩けば見かけるドラえもんキャラクターの銅像。街中を走るドラえもんトラム。長年多くの人々に愛され続けているドラえもんが富山で誕生したというのは、誇るべきことです。心あたたまるメッセージをたくさん残してくれた藤子さんに感謝し、富山ゆかりの文学として大切にしていきたいと思えます。

映画ドラえもん のび太と緑の巨人伝

地球の植物を自分の星に移住させ、地球人を根絶やしにしようとするからむ植物型宇宙人の計画を阻止しようとするドラえもん、のび太らの活躍を描く。

『花子のくにの歳時記』を読んで

ふるさとで深呼吸

富山高等学校三年 松田 梨子

「花子のくにの歳時記」と初めて出会ったのは、高志の国文学館での文学講座だった。辺見じゅんさんの作品といえば、「男たちの大和」のような力強く、読み手も「よし、読むぞ」と気合を入れて真正面から向き合うようなイメージが私の中にあつた。しかし、このエッセイ集は、日本の四季が鮮やかに描かれ、その季節に合った全国各地の民話が、方言を混ぜて語られている、とてもやわらかな作品だ。一気に読む必要もなく、ゆっくりページをめくりながら、日本の四季や民話の舞台を旅することができるのだ。この「花子のくにの歳時記」を通して、辺見じゅんさんが伝えたかったことは何だったのだろうか。私は、二つのメッセージを受け取った。

まず一つ目は、「四季がある素晴らしさを忘れず、古くから伝わる年中行事などを大切にして欲しい」ということ。春夏秋冬、移り変わる自然の描写は美しく、この国に生まれたことを感謝せずにはいられない気持ちにさせてくれる。また、正月や節分、桃の節句などの年中行事の由来が分かりやすく書かれており、たとえ手間がかかっても、次の世代にずっと手渡して伝えていかなければいけないことなのだと思う。また、平和への祈りもあふれており、この本の読み手が十代であれ、八十代であれ、一人一人の胸に平和への思いが生まれることを願っている気がした。

二つ目は、「記録することは大切」ということだ。あとがきに、「かつて出会った方々を再訪したが、大半が亡くなられていた。再び民話を語ってもらったが、方言も語りの内容も十数年前とは著しく異なっていた」という一節があつた。この本に登場する全国各地の民話は、ほとんど辺見じゅんさんの足と耳によつて集められたものばかりだ。語り部が年を取ったり、亡くなったりすると、もう二度と同じ話を聞くことはできない。だからこそ、書くこと、つまり記録して残すことは重要だと、辺見さんは考えたのだと思う。辺見さんは幼少期

を富山で過ごされた。その時に大好きなおばあさんから聞いたという民話も、富山弁で書きつづられている。「書く」ことは、「残す」ことである。ただ語りつぐことよりも、文字という形で表現すれば、それは確実に未来へつながる。だからこそ、辺見さんは季節の営みも、日本の美しい行事や興味深い民話も、書き留めておこうと決心したのだと思った。

このエッセイを読むと、ふるさとに愛着が湧く。そして、外へ出て、思いきり深呼吸したくなる。夏になると暑さに疲れ、秋を恋しがる。冬の寒さがこたえると、春を待ちわびる。それは、必ず季節が巡ることを私達が知っているからだ。夏の次に急に冬が来たり、その次に秋になったりはしない。そんな安心感の中で、私達はやはり季節感をあまり大切にしなくなってきたりするのかもしれない。七段飾りのひな人形を出すのは大変なので、いつの間にか出さなくなったと、知り合いの方が話していた。私自身、節分の豆を「鬼は外」なんて大声でまくのは恥ずかしいし、面倒だとかこの数年は思っていた。

私は高校三年生。来年の春にはふるさとを離れるかもしれない。しかし、季節感を失わず、ふるさとを大切にする気持ちも忘れないつもりだ。もしも忘れかけた時には、また「花子のくにの歳時記」を読み返せばいいのだ。

幼いとき、辺見じゅんさんにかけていただいた言葉が今でも胸に残る。「お友達と仲良くね。そして、お父さん、お母さんを大切にね。」



花子のくにの歳時記

辺見 じゅん／著 角川春樹事務所
水橋の祖父母のもとで育った著者が、民話の心の足跡をたどる。各地で民話の語り手と出会い、四季の美しさ、人間の営みを温かく描き出すエッセイ集。

『螢川』を読んで
郷里の自然を考える

小杉高等学校三年 竹田 里穂

普段は見逃してしまう景色の中にも、何かのきっかけでいろいろと見えてくるものがある。田舎ならではの空気、風情・情緒である。私にとってそのきっかけとなったのは、今回読んだ宮本輝作「螢川」である。「螢川」の舞台は、私の故郷である富山県だ。落魄した父の死、友の事故死、淡い初恋を描き、最後は蛍の大群の妖光に命の輝きを見るところという物語である。「螢川」は、春から夏に移り変わる季節の物語と云うことだが、私はこの物語の、「蛍の大群は、天空へ天空へと光彩をばかしながら冷たい火の粉状になって舞い上がっていた」や、「蛍の綾なす妖光が、人間の形で立っていた」という蛍の表現がとても印象に残っている。なぜなら、この部分を読んだ時、童夫や英子の見ている風景が私にも見えるような感覚になったからである。というのも、小さい頃私も自然の風景に感動させられた経験があるのである。

小学生の頃、夏休みは毎年砺波市に住む祖母の家を訪れ、オタマジャクシやザリガニを捕ったり、花火を観に行ったり、祖母の家で育てた野菜や果物を井戸水で冷やして食べたりと自然を満喫していた。一番思い出に残っているのは、みんなで星を見に行ったことだ。小学生だった私は、星を見に行こうと言われて、正直退屈だろうなと思ったのを覚えている。なぜなら、その何日か前に花火を見に行ったばかりだったからだ。その時見た花火はとても綺麗だった。砺波市は散居村なので、視界を遮る建物があまりなく、市内中に響き渡る轟音とともに煌びやかな花火を見ることができた。そのため、その時は尚更星の魅力を理解できなかった。だが、その時に見た星は、花火の何倍も綺麗だった。その日は快晴だったため、平地でも星はくっきりと見えていたが、少し山のほうに上ってみると更にたくさんまばゆい光を放つ星たちを見ることのできた。大きい星から小さい星まで、とにかく空いっぱいを覆う星たちを見たときは、子供ながらに自然の美しさに感動したのを覚えている。

今思えば不思議なことだ。なぜ今は自然と触れ合う機会がほとんどないのだろうか。昔は虫や魚も平気で触ることができたし、山や川に行ったりもしていた。だが、今は虫も怖いと感じるし、山や川に行くこともなくなった。しかし、歳を重ねていくうちに自然と触れ合う機会が減っていったのは私だけではないと思う。年齢が上がるにつれて、興味・関心が別のものに移ってしまうのは仕方ないことだ。そんな中で、「螢川」を読むと、なんだかまた子供の頃のように自然を満喫したくなった。まるで自分自身も小説の中に入って主人公と一緒に郷土の景色を見ているかのような表現が何箇所もあったからだ。

「螢川」を読んで、私は自分が生まれ育ったふるさとの姿をもう一度ちゃんと見てみようと思った。朝の通学路では、立山連峰が雄大な姿で挨拶をしてくれて、帰るときには夕日とともに「おかえり」と出迎えてくれる。セキレイがそこら辺でチョコチョコ歩き回っていて、どこからか田んぼに水を張る音が聞こえてくる。また、様々なところで飛び交う方言。汚い言葉だと言われることもあるが、私は地元の言葉である富山弁が好きである。私が知っている以外にも、ふるさとの姿はたくさんあるだろう。それらを、自分の足で歩いて探してみたい。もしかしたら、「螢川」に出てくるような幻想的な風景が見られる可能性がある。地元のことについて考える機会をくれた「螢川」に感謝したい。そして何より、富山の大自然にこれからも感謝して生きていきたい。



螢川・泥の河

宮本 輝／著 新潮文庫刊

昭和三十年代の富山県を舞台に、父親の事業がうまくいかない中で、少年の淡い恋の目ざめと人間の成長を描いています。雪国ゆえの豊かな水の描写や、春の喜びとともに蛍の乱舞する情景は圧巻。芥川賞を受賞した名作です。

生と死

『螢川』を読んで

小杉高等学校三年 中野 希南

私は、宮本輝さんの「螢川」という作品を読みました。主人公の竜夫は、父の重竜に死が近いというを感じて初めて、今までは気づけなかった大事な存在だということを感じたと思います。その気持ち、「死」ということ、しあわせということ、その二つの事柄への漠然とした不安が、突然波のように体の中でせりあがってきて」という箇所を表れていると思います。竜夫は、これからの生活に不安を抱きながらも、螢が出る場所を教えてくださいと銀蔵じいさんと母の千代、英子の四人で螢を見に行きます。そこで一生に一遍の光景に出逢い、螢の「生」を感じ、それぞれ新しい生活へと進んでいきます。

この作品を読んで心に浮かんだのは、「命」という言葉です。人間にも動物にも必ず死が訪れます。生きているものには、出会いと別れがあります。その死と生が描かれている作品だと思いました。

人には、誰でも愛する人がいて、登場人物にもそれぞれ大切な人がいます。竜夫は、中学生で父親という存在を失いました。人の「死」は身近な人いろいろな影響を与えます。重竜が亡くなったことで、竜夫と千代の親子は会うことがないと思っていた人と会い、知らなかったことを知ることになりました。私も、竜夫と同じように愛する人を失った経験があります。私は小学生の時に、母親を病気で亡くしました。まだ幼かったため、両親からは母の病気について詳しく教えてもらっていませんでした。そのため、母が亡くなってから随分経ってから母の病気について聞き、知らなかったこともたくさんありました。

生きていると、関わる人との間に様々な思い出ができます。人は死んでしまうと、話したり触れたりすることはできないけれど、私たちの心の中にその人との思い出が残ります。この物語の中でも、故人を思い出す場面がいくつかありました。記憶は、その時と似た状況や、一見何の関係もなさそうな行動や一言で、蘇ってくることがあります。亡くなってしまうと、その人との思い出は薄

れてしまうかもしれないけれど、きっと亡くなった人を忘れることはないだろうと、この物語を読んで思いました。

私はこの物語の中で、最後の螢の場面がとても印象に残りました。初めは暗い印象を感じましたが、螢が力強く生きていこうと生命を形作っていく様子に「生」を感じたため、「死」から「生」に印象が変化したことによって、力強さが生み出されたのだと思います。螢の様子が心に描いていた華麗なおとぎ絵ではなかったということもその一つだと思います。螢の乱舞にこれからの行末をかけたことで、新たな暮らしに向けて進んでいく後押しをしてくれるものになったと思いました。また、屍という、汚らしいものを連想する言葉が入っているのに、その描写はとても美しい情景として私の心に響いたことにも感銘を受けました。

この物語は、私たちが生きる上で必ず経験する「生と死」について、生きていることの素晴らしさと、死ぬということ、そして命の大切さを教えてくれた物語でした。人は、愛する人の死を経験したことにより、生きていることを大切にし、自分の人生を大切にするようになると思います。また、生きていることの価値や日々の何気ない生活に喜びを感じます。人の死を、亡くなったというだけで終わらせてはいけません。亡くなっても必ず新たな生命は誕生します。人にはいつ「死」が訪れるかわかりません。そのためにも今を大切に過ごす必要があります。私は、自分や家族・友人など周りの人、飼っている動物の命を思いやりながら、「生」を大切にしようとして強く心に誓いました。

『ドラえもん』を読んで

後世に受け継がれてゆく思い

高岡高等学校二年 長柄 まりも

古人が自分がいたことを歴史に刻むために歌を詠んだというのを、昔耳にしました。自分の思いを残せた人がどれほどいたのか、私達が知っている範囲で知ることは可能でしょうかけれど、それでも自分の思いを残せなかった人の方が圧倒的に多かったのだらうと思います。だから、自分の思いを後世に伝えられた人達を私達は評価し、そしてまた後世へとその思いをつないできたのではないかと私は考えるのです。

藤子・F・不二雄、この名前を日本に住む人なら一度は聞いたことがあるはずです。今となつては国を代表する作品の一つであろう「ドラえもん」。なぜ、この作品が人々に愛される作品となつたのか、そして作者が伝えたかった思いとは何だったのかを辿っていきたいと思います。

ドラえもんは、一九六九年、今から約五十年ほど前に誕生したそうです。当時のドラえもんはギャグ漫画としての特色が強く、ストーリー性の強い作品は見られなかった、とも。しかし、今日のドラえもんといえば、名言など、良作だと思わせられるようなストーリー性のある作品、そういうイメージではないでしょうか？実は、このドラえもん、読者層が小学生の全学年と広範囲に展開されていた為に、低学年はひみつ道具の楽しさを全面に押し出したギャグ性が強い話。中学年ではのび太の成長が描かれ、そして高学年になると社会問題などの難しい複雑な内容も増える・・・そんな風に書き分けられていたんですね。それが今では大人にも評価され、藤子・F・不二雄さんの死去後も受け継がれてきた訳です。子供達の心を育み、今となつては私達の心の中にある人として大切な事を形作っているこの作品は、これからも人々によって受け継がれてゆくのだと思います。

次に、ドラえもんが生みだしてきた数々の名言を少しあげてみようと思います。

「人にできて、きみだけにできないことなんてあるもんか」「今の時代が気に入らないとこぼしているだけじゃ何にもならない」「一番いけないのは、自分なんかだめだと思ひ込むことだよ」「君はこの先、何度も転ぶ。でもその度に立ちあがる強さも君は持っているんだ」・・・等々。まだまだありますが、どれも私達の心に響くようなものばかりだと思います。そして、作者の藤子・F・不二雄さんが残した名言、「のび太にも良い所が一つだけある。それは、彼は反省するんです。いつまでもいつまでも今より良い人間にならうと努力するんです」。アニメでよくみるドラえもんに助けってもらってばかりののび太は、ドラえもんが出す道具をいくら使っても、最後は人間次第なのだというメッセージなのかもしれませんね。こういう、人として大切な基礎を作者は伝えたかったのかもしれない。

今となつてはもう、作者の思いを聞くことは叶いませんが、その思いは、私達が作品から各々読みとっていけばよいのだらう、とも思います。古人の歌から思いを感じとつたように。ですからドラえもんという一つの作品から大切な思いを感じた私は、この同じ富山で生まれ育った藤子・F・不二雄さんとその思いに敬服の念を抱かずにはおられないのです。

『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』を読んで
飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ

高岡市立高岡西部中学校一年 中出 すみれ

私は、初め、題名にひかれて、読んでみようと思いました。でも、その本の内容は、とても深刻で、考えたこともない難しい内容……「死」でした。作者の井村さんは、富山県出身の医師で三十一才の若さで不治の病にかかり、死に直面した身でありながらも、最後のぎりぎりまで周囲に秘密にし、医師として、夫として、父として、息子として立派に、残された短い日の中で精いっぱい生きました。この本は、そんな井村さんが、残していく幼い長女と妻のお腹の子に自分を表現した言葉を残すために書きつづったものでした。

私は涙を流しながらこの本を読み進めました。病気でありながらも最後まであきらめずに精いっぱい、自分らしくあろうとする姿は、医師として一番近く死と直面してきたからであり、病身でありながらもできるかぎり病院で働こうとするのは、担当する末期の患者を放り出していく訳にはいかないという強い責任感からでした。本には、その患者の話も書いてあり、それぞれに事情があり、死への向き合い方もそれぞれでしたが、ただ生きたいと戦っていた姿は、皆さん立派だと思いました。

私の周囲の人たちは、みんな元気で、私は病気を詳しく考えたことがなかったのですが、井村さんの病気は、どういふものなのか調べてみました。井村さんは、「骨肉腫」という病気で、代表的な骨の悪性腫瘍でした。つまり、ガンです。十代に約半数、五〜二十四才までに三分の二の患者が発症するなど、盛んに運動をしている活動性の高い少年期に発病し、ひざや肩に近い所から発生し、診断がついた時点でなるべく早く切断術が行われます。しかし、切断後に次第に肺転移が現れ、五年生存率は、十〜十五パーセント程度といわれる、大変おそろしい病気でした。

井村さんは、右足を切断します。が、職場先の院長から、いやでなければ復帰を考えてみないかと誘われ、義足となり厳しいハビリ後、見事に医師と

して復職するのです。私だったら義足となった時、他の人を救うような立場に戻るなんてできないだろうと思います。本当に井村さんは、心の強い人です。本の中で井村さんは、「決して後ろを振り返らないこと」がリハビリで大事だと言っています。「人生も同じだと、つねに前を向いて歩いてゆきたいものだ。そうすればどんな不自由でも克服してゆくことができるのだ……。」この信念が病氣と戦う力の一つだと思えます。

もう一つの原動力は思いやりだと思います。井村さんの周りの人々は思いやりある人が多く、その思いに応えるように井村さんは必死に病氣と戦い、苦しむ不様な姿を見せまいと元気に振るまおうと人前では笑みをたやませませんでした。それは、プライドだけではなく、夫として、息子として、兄として、父として、友として、人々への思いやりがあつてこそだと思えます。本には、残してゆく子どもたちに思いやりのある子に育ってほしいと書かれています。井村さんが死に向かいながらも立派に生きぬいたのは、思いやりあつてこそだと私は思いました。きっと子どもたちも父の願いや信念に気付いたのではないかと思います。

元日に井村さんは、「あたりまえ」という詩を残しています。「あたりまえのことこんなすばらしいことを、みんなは決してよるこばない、そのあたりがたさを知っているのは、それを失くした人だけ、なぜでしょう、あたりまえ」という言葉はとても強く心に残りました。私は、大切なものを失う前に、そのあたりがたさをちゃんと感じられる、あたり前のことをちゃんと大事だと知って感謝して生きる人になりたいと思います。まずはそれがスタートラインで、ものごとの大事さがわかれば、思いやりの心も自然に持てるのだと思います。



飛鳥へ、
そしてまだ見ぬ子へ

井村 和清 / 著 祥伝社

不治の病に冒された砺波市出身の若き医師が、家族や周囲の人々へ、感謝の心とともに愛情を深めてゆく手記。妻による新たな原稿が加わり、新たな感動を生む新装版です。映画化されました。

文芸部門・詩 銀賞

『田部重治歌碑』を鑑賞して

田部重治様へ

滑川高等学校一年 吉田 麻愛

ここに美しい学び舎がある
スポーツに汗し

疲れも忘れた幸せそうな笑顔

ここに美しい里山がある

人が立ち入ることは許されず

風に吹かれれば 静寂しじまを破るように

草木くさきのさざめきが聞こえる

ここに美しいふるさとがある

共に育った仲間達が

どこからともなく集い 海の幸をほおばる

ここに美しい学び舎がある

愚直なまでに何も変わらず

幾世代をも育んできた

ここに 美しい学び舎がある

田部重治歌碑

(山室小学校前)

「もの皆の変わりしときく
ふるさとのわが学び舎は
いかにあるらん」
山室小学校前にこの作
品の歌碑がある。

文芸部門・詩 銅賞

『マイの魔法と家庭の日』を鑑賞して

魔法

高岡高等学校二年 横澤 瑠晟

無知ゆえの過ち

幼さゆえの甘え

ただ愛されたくて

強がっていたあの日の私

多忙ゆえのいらだち

不安ゆえの焦り

ただ約束を果たしたくて

悩んでいたあの日の僕

暗闇の中で

突然芽生えた一筋の光

ほっこりと優しい光

花火のようなまばゆい光

ある冬の日の不思議な魔法が

気づかせてくれた

自分を包む家族の愛

短編アニメーション作品 マイの魔法と家庭の日

富山県・株式会社ピーエーワークス
ごく普通の家庭である立海家。「家庭の日」を設けるも、娘のマイだけは乗
り気でなかった。しかし、母親のユキの妊娠を機にマイの人生も大きく変わろ
うとしていた。原案は、第40回「どやま県民家庭の日」作品コンクールで知事
賞を受賞した清水萌子さんの作品「月曜日には『家庭の日』」。

『おおかみこどもの雨と雪』を鑑賞して

おおかみも 人間も

高岡南高等学校二年 北越 未侑

おおかみも 人間も

愛がなくては、生きていけない。

誰かの温もりをそっと探して、寄り添って生きている。

おおかみも 人間も

自分の意思で、選択し続ける。

誰かとぶつかっても、傷ついても、傷つけられても。

おおかみも 人間も

悲しみを抱えて、生きている。

それは誰かの死であったり、誰かとの別れであったり。

おおかみも 人間も

自分の世界を、探し求めている。

ほかの誰でもない、自分自身の

その世界を形作るのは、誇りであったり、使命であったり、夢であったり。

おおかみも 人間も

きつと大差はない。

心があつて、仲間が、家族がいて。

その二つが交わることは、何ら不思議なことではないのだ。

富山の四季

射水市立大門中学校二年 三高 愛菜

春の風にさそわれて

真っ白だったキャンパスに

色とりどりの花が咲き

とってもきれいなじゅうたんになったよ

せみの声に

祭ばやし

夜空にきれいな花が咲き

暑さを忘れる夏の夜

豊かな実りに恵まれて

赤・黄・みどりに色どられ

冬じたく前の秋げしよう

富山湾に響くブリ起こし

空から舞い降りる真っ白な雪

長い冬のはじまりだ

文芸部門・短歌 金賞

『月影ペイペ』を読んで

恋する踊り子

富山高等学校一年 林 祐太郎

坂の町

おわらの音を

運びゆく

流れぬ恋と

流れゆく髪



この一冊

月影ペイペ

小玉 ユキ／著 小学館

伝統芸能「おわら」を守り継ぐ、情緒溢れる地方の町、富山市八尾を舞台に吹き込む謎と秘密の風。富山弁で語られるセリフや、背景、空気感など情緒と青春がしなやかな感性と細やかな視点で描かれています。

文芸部門・短歌 銀賞

『ふるさと文学館第二〇巻より「七夕の町」』を読んで

歩み

高岡南高等学校一年 西野 琴未

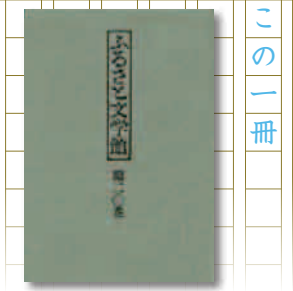
終戦の

面影残らぬ

今日も

歩くこの場所

ここも焼跡



この一冊

ふるさと文学館 第二〇巻

八木光昭／編集 ぎょうせい

横山源之助の書いた富山県初の小説、大正から昭和にかけて活躍した小寺菊子の作品、大井冷光の童話など、貴重な小説・詩歌・随筆・童話等が収められている珠玉の作品集。

文芸部門・短歌 銀賞

『劔岳（点の記）』を読んで

劔岳

富山高等学校一年 亀田 俊哉

立山に

聳える巖

劔岳

その切先に

何を湛える



この一冊

劔岳 点の記

新田 次郎／著 文春文庫刊

日本地図を完成させるため、不可能と言われた初登頂と山岳測量に取り組んだ主人公らの不屈の努力、山を愛する人々の友情を描きます。山頂で発見された千年前の錫杖が解けない謎として心に残る名作です。映画化されました。

文芸部門・短歌 銅賞

『劔岳（点の記）』を読んで

劔岳より

富山高等学校一年 奥村 琉生

幾人を

呑めば済むのか

劔岳

その頂や

未踏の禁忌

文芸部門・短歌
銅賞

『ドラえもん』を読んで

心

たくさんの

ドラえもんが

そばにいて

明日を生きる

のび太の私

富山高等学校一年 沢田 陽向子

文芸部門・短歌
佳作

『万葉集』を読んで

富山の自然と生きる

雪解けに

逆らうように

今もなお

清く聳える

霊峰立山

射水市立大門中学校二年 野岸 慧太郎

文芸部門・俳句 銀賞

『風の盆恋歌』を読んで

おわら風の盆

黒部市立桜井中学校一年 佐々木 美侑

子供らも

すげ笠かぶり

風の盆



文芸部門・俳句 銅賞

「おおかみこどもの雨と雪」を読んで

富山高등학교一年 尾島 智遥

翔ける野に

光る粉雪

満ちる笑み

文芸部門・俳句 銅賞

『おおかみこどもの雨と雪』を読んで

足跡

富山高等学校一年 西野 真由

染まつてく

雪のキャンバス

君色に

文芸部門・俳句 銅賞

『おおかみこどもの雨と雪』を読んで

それぞれの成長

富山高等学校一年 松崎 遥南

光差す

雪解け山の

岐路に立つ



美術部門 知事賞

「ねぶた流し」横川 桃子 (富山中部高等学校 2年)
<滑川のネブタ流しと夏を彩る民俗行事> 530 × 455

【凡例】 部門名
題名/名前 (学校名・学年)
< >は原作 サイズ (タテ×ヨコ) mm

映画 人生の約束

石橋冠監督の初めての劇場作品。石橋監督が『第二のふるさと』と呼ぶ富山県射水市新湊地区を舞台にしたオリジナル・ストーリー。会社の拡大にしか興味のない仕事人間が、かつての親友の死をきっかけに自分自身の人生を見つめなおす。

「人生の約束」製作委員会



美術部門 金賞

「繋がる」井波 克記 (高岡第一高等学校 2年)

<人生の約束> 294 × 420



美術部門 銀賞

「懐かしい風景」田嶋 由 (富山中部高等学校 2年)

<富山の百山> 455 × 530

この一冊

富山の百山

富山県山岳連盟／編 北日本新聞社

ふるさとの里山から三千メートル峰まで、山を愛する人びとの
待望のガイドブック。

この一冊

青桐

木崎 さと子 / 著 文芸春秋

治療を拒み死を受容する叔母とその姿を見つめた主人公に訪れたものは、滅びる肉体とよみがえる心の交叉を描く芥川賞受賞作品。



美術部門 銀賞

「夢の中」西村 日菜子 (小杉高等学校 2年)
 <青桐> 542 × 392



美術部門 銀賞

「夕焼け」毛利 菜那子 (富山北部高等学校 2年)
 <RAILWAYS 愛を伝えられない大人たちへ> 271 × 392

映画 RAILWAYS 愛を伝えられない大人たちへ

RAILWAYS2 製作委員会

富山地方鉄道を舞台に、定年を目前にした実直な鉄道マンとその妻が人生の節目を迎えて様々な不安や迷いに揺れ動くさまを美しい風景をバックに描く。



美術部門 銅賞

「夕焼けに染まる散居村」石並 央梨 (南砺市立城端中学校 1年)
<砺波平野の散居村> 271 × 392



美術部門 銅賞

「優」藤田 璃子 (南砺市立城端中学校 1年)
<高岡大仏> 392 × 271



美術部門 銅賞

「雫」清水 萌々子 (富山中部高等学校 2年)
<おおかみこどもの雨と雪> 455 × 530



美術部門 銅賞

「花の家」種昂 なお実 (富山中部高等学校 2年)
<おおかみこどもの雨と雪> 455 × 530



美術部門 銅賞

「ほしをみつけた」石坂 光 (富山北部高等学校 2年)

<ほしのふるまち> 271 × 392

この一冊

ほしのふるまち

原 秀則 / 著 小学館

東京の高校の冷たい人間関係に挫折した少年が、転校した水見の高校で、自分の生きる意味に気づく成長の物語。水見の自然、心優しい人々、隣に住む少女との恋や友情が描かれる。



美術部門 佳作

「焼きたて」水野 佳乃子 (富山大学人間発達科学部附属特別支援学校中学部 3年)

<魚津のパン屋さん> 271 × 392

映画 魚津のパン屋さん

タカオカンドリーム社

富山湾に面した中都市・魚津市を舞台に、夢叶わず地元に戻ってきた主人公がパン作りを通して、地元にいる意味を、自分にかきさないことを探し求めるハートフルコメディ。



写真部門 知事賞

「暮らしの中で」桑田 莉奈 (富山東高等学校 2年)
<おおかみこどもの雨と雪> 364 × 257

【凡例】 部門名
題名／名前 (学校名・学年)
< >は原作 サイズ (タテ×ヨコ) mm



写真部門 金賞

「坂のまち」伊藤 大河 (高岡第一高等学校 2年)

<風の盆恋歌> 210 × 297



写真部門 銀賞

「帰宅」青柳 萌 (富山高等学校 1年)

<長い道> 257 × 364

長い道

この一冊

柏原 兵三 / 著 桂書房刊

戦時中、父の郷里に疎開した少年の苦しい体験と成長を描く。
映画「少年時代」の原作。

この一冊

富山の風景

大島 文雄／著 新興出版社
富山大学名誉教授であった著者が、富山の風土と人々、日本人の美意識に関わる視点からの問題提起、人を想う心などを新聞社などに寄稿した四十三の随想が収録されています。



写真部門 銀賞

「チューリップにつつまれて」泉 七菜 (富山高等学校 2年)

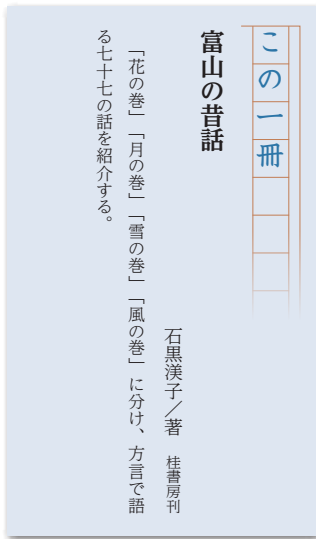
<富山の風景> 257 × 364



写真部門 銀賞

「雨模様、心模様」川尻 ちひろ (富山東高等学校 2年)

<月影ベイベ> 297 × 210



写真部門 銅賞

「笑い泣き」宮谷 哉汰 (小矢部園芸高等学校 1年)

<富山の昔話> 257 × 364



写真部門 銅賞

「町の若衆」米島 菜津美 (高岡第一高等学校 2年)

<風の盆恋歌> 297 × 210



写真部門 銅賞

「主役を奪え!怪盗チューリップ」永瀬 凌斗 (泊高等学校 2年)

<富山 わがまちこころ一番> 210 × 297



写真部門 銅賞

「夏の夜風」高橋 綾 (富山西高等学校 1年)

<人生の約束> 210 × 297

この一冊

越中万葉百科

高岡市万葉歴史館／編 笠間書院

大伴家持らが越中赴任中に詠んだ歌など、とやまに関わる歌とその解説を1冊にまとめました。「万葉集」の中でも、織外では最多となる三百三十七首の「越中万葉」の文学的な価値とともに、北陸の自然にふれて大きく開花した大伴家持の歌作りを解明します。



写真部門 銅賞

「朝」野吾 茉裕 (富山東高等学校 1年)

<越中万葉百科> 210 × 297

平成28年度「高志の国文学」情景作品コンクール入選作品一覧表

○文芸部門（散文・詩）

賞	題名	分野	学校	学年	名前	題材
知事賞	猫型ロボットを待ちきれない	詩	高岡南高等学校	1年	小嵐 龍太郎	ドラえもん
金賞	故郷、とは	散文	高岡南高等学校	1年	田形 梨恵	おおかみこどもの雨と雪
銀賞	ドラえもん分析	散文	高岡高等学校	2年	松村 妙子	ドラえもん のび太と緑の巨人伝
	ふるさとで深呼吸	散文	富山高等学校	3年	松田 梨子	花子のくにの歳時記
	田部重治様へ	詩	滑川高等学校	1年	吉田 麻愛	田部重治 歌碑
銅賞	郷里の自然を考える	散文	小杉高等学校	3年	竹田 里穂	瑩川
	生と死	散文	小杉高等学校	3年	中野 希南	瑩川
	後世に受け継がれてゆく思い	散文	高岡高等学校	2年	長柄 まりも	ドラえもん
	魔法	詩	高岡高等学校	2年	横澤 瑠晟	マイの魔法と家庭の日
	おおかみも 人間も	詩	高岡南高等学校	2年	北越 未侑	おおかみこどもの雨と雪
佳作	飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ	散文	高岡市立高岡西部中学校	1年	中出 すみれ	飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ
	富山の四季	詩	射水市立大門中学校	2年	三高 愛菜	

○文芸部門（短歌・俳句）

賞	題名	分野	学校	学年	名前	題材
金賞	恋する踊り子	短歌	富山高等学校	1年	林 祐太郎	月影ベイベ
銀賞	歩み	短歌	高岡南高等学校	1年	西野 琴未	ふるさと文学館 第20巻より「七夕の町」
	劔岳	短歌	富山高等学校	1年	亀田 俊哉	劔岳<点の記>
	おわら風の盆	俳句	黒部市立桜井中学校	1年	佐々木 美侑	風の盆恋歌
銅賞	劔岳より	短歌	富山高等学校	1年	奥村 琉生	劔岳<点の記>
	心	短歌	富山高等学校	1年	沢田 陽向子	ドラえもん
	「おおかみこどもの雨と雪」を読んで	俳句	富山高等学校	1年	尾島 智遥	おおかみこどもの雨と雪
	足跡	俳句	富山高等学校	1年	西野 真由	おおかみこどもの雨と雪
	それぞれの成長	俳句	富山高等学校	1年	松崎 遥南	おおかみこどもの雨と雪
佳作	富山の自然と生きる	短歌	射水市立大門中学校	2年	野岸 慧太郎	万葉集

○美術部門

賞	題名	学校	学年	名前	題材
知事賞	ねぶた流し	富山中部高等学校	2年	横川 桃子	滑川のネブタ流しと夏を彩る民俗行事
金賞	繋がる	高岡第一高等学校	2年	井波 克記	人生の約束
銀賞	懐かしい風景	富山中部高等学校	2年	田嶋 由	富山の百山
	夢の中	小杉高等学校	2年	西村 白菜子	青桐
	夕焼け	富山北部高等学校	2年	毛利 菜那子	RAILWAYS 愛を伝えられない大人たちへ
銅賞	夕焼けに染まる散居村	砺波市立城端中学校	1年	石並 央梨	砺波平野の散居村
	優	砺波市立城端中学校	1年	藤田 璃子	高岡大仏
	雫	富山中部高等学校	2年	清水 萌々子	おおかみこどもの雨と雪
	花の家	富山中部高等学校	2年	種昂 なお実	おおかみこどもの雨と雪
	ほしをみつけた	富山北部高等学校	2年	石坂 光	ほしのふるまち
佳作	焼きたて	富山大学人間発達科学部附属特別支援学校 中学部	3年	水野 佳乃子	魚津のパン屋さん

○写真部門

賞	題名	学校	学年	名前	題材
知事賞	暮らしの中で	富山東高等学校	2年	桑田 莉奈	おおかみこどもの雨と雪
金賞	坂のまち	高岡第一高等学校	2年	伊藤 大河	風の盆恋歌
銀賞	帰宅	富山高等学校	1年	青柳 萌	長い道
	チューリップにつつまれて	富山高等学校	2年	泉 七菜	富山の風景
	雨模様、心模様	富山東高等学校	2年	川尻 ちひろ	月影ベイベ
銅賞	笑い泣き	小矢部園芸高等学校	1年	宮谷 哉汰	富山の昔話
	町の若衆	高岡第一高等学校	2年	米島 菜津美	風の盆恋歌
	主役を奪え！怪盗チューリップ	泊高等学校	2年	永瀬 凌斗	富山 わがまちここの一番
	夏の夜風	富山西高等学校	1年	高橋 綾	人生の約束
	朝	富山東高等学校	1年	野吾 菜裕	越中万葉百科

応募総数 1,672点（文芸1,131点、美術140点、写真401点）

審査委員会委員

委員名	所属等
<委員長> 中井 精一	富山大学人文学部教授
浅地 豊	富山県水墨美術館館長
金山 嘉宏	ミュゼふくおかカメラ館館長
腰本 公彦	県高等学校文化連盟写真専門部会 (富山高等学校教諭)
須河 弘美	高志の国文学館副館長
作道 正也	県中学校文化連盟新聞・文芸専門部代表 (富山市立奥田中学校教頭)
寺田 孝子	県中学校文化連盟美術専門部代表 (高岡市立牧野中学校教諭)
永井 衛	富山県立図書館館長
野畠 峰彦	県高等学校文化連盟美術・工芸専門部会 (高岡高等学校教諭 県高等学校文化連盟事務局長)
早川 昌成	県高等学校文化連盟文芸専門部会 (八尾高等学校教諭)
蒲田 雅樹	富山県教育委員会生涯学習・文化財室青少年教育班長

表彰式

日時：平成28年11月14日（月） 場所：高志の国文学館



受賞者の皆さん

平成29年1月発行

平成28年度「高志の国文学」情景作品コンクール入選作品集

編集・発行／富山県教育委員会生涯学習・文化財室

〒930-8501 富山市新総曲輪1-7

TEL：076-444-3434 FAX：076-444-4434

ホームページ http://www.pref.toyama.jp/cms_sec/3009/index.html